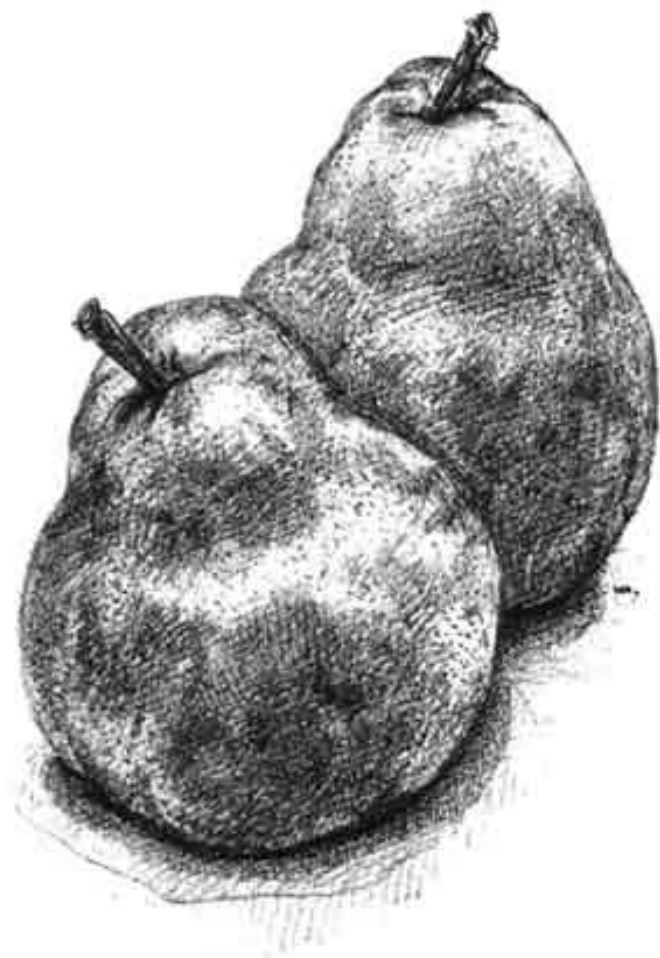


昭和43年7月1日創刊
平成22年2月5日発行(毎月5日1回発行)
第50巻2月号(通巻607号)

風土



2

初
春

神
蔵

器

柚子湯して妻におくれし思ひかな

クリスマス妻の時刻の第九満つ

青郵は一夜飾りの松提げて

佗助の一が咲いて片糸くぼ

火を焚けば父母の集まる十二月

霜 降 る か 血 圧 百 七 十 五

鳩 潜 る け ぶ ある わ れ に 飽 き も し て

桂 郎 の 遺 影 に 見 ら れ 大 根 引 く

笹 子 鳴 く 鎌 倉 七 口 仮 粧 坂

て の ひ ら に 一 寸 這 つ て 蝶 の 凍 つ

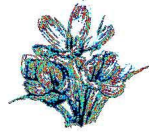
ゆ た か な る 白 息 を こ そ 信 じ た し

初 春 の 怒 濤 の ご と く 八 十 三



竹間集

同人作品



「淡交」以後(十四)

野沢しの武

菰とればはやも苾炎え牡丹の芽
忌むといふ夜の爪切る白牡丹
老いを送る紙雛五段飾り付け
啓蟄や新しき雲槻の木に
髪なぶる風雪囲まだ解かず
九名が全校生徒水温む
まんさくの捻くれ咲きや羊生る

冬 耕 鈴木 石花

燧道を出て渡良瀬と紅葉山
開帳の阿弥陀堂まで紅葉散る
伐られたる根元取巻く柿落葉
桂郎忌くから忌つづく峡の宿
職退きし漢故郷に冬耕す
日光に明治の館冬日さす
年末に三家族寄る宿予約

秋まつり 山路 紀子

雁や灯ともしころの散居村
秋祭藁の大蛇が町を這ふ
秋天へユニオン・ジャック翻る
権禰宜の木杵の照りや濃竜胆
秋高し的の真心を矢の射ぬく
秋の滝女人行者の打たれをり
参道の萩刈る鎌を持たさるる

時雨忌 岩木 茂

雁渡る芭蕉の旅の点と線
雪来るか糸取唄を呟けば
高々と掛けて湖岸の大根干し
水郷に上り下りや柳散る
時雨忌のしぐれてきたる近江かな
枯葭の中ゆく舟や翁の忌
雨止むと水郷に北風吹くといふ

紅ましこ 相沢有理子

ゆるやかに下る柚道沢胡桃
椋鳥のげに騒がしく村昏るる
魚板打つ香り尽くして藤袴
ついそこに紅ましこ啼く疎林かな
旅半ば野辺に咲き満つ草牡丹
澄む秋のわが血を継ぎし嬰兒肥ゆ
地の渴き潤ふ秋雨旅恋し

立冬 中谷 葉留

風土記念号身ほとりに秋惜しみけり
立冬の柱に矢筈吊るしけり
外したる眼鏡をさがす小春かな
立冬の音の一つに紙を割く
しぐるるや小出しにうつすマツチ箱
病院に送迎バス着く返り花
糠床に足す糠の量神無月

きりたんぼ 小林 輝子

雪迎へ発つてゆきたる冠木門
ゆく秋や雲の変へゆく湖のいろ
潟尻の日を弾きては犬子草
刈小田の二枚三枚湖荒るる
立冬や貝むらさきに山暁くる
乳頭山にゅうとうのふもとより昏れきりたんぼ
風呂吹やきのふの雨のまだ残り

冬のはなわらび

— 山田 暢子 —

伊豆の友一人づつ逝き冬に入る
裸木となるまで風の大櫓
銀杏散る光の浄土まだ歩く
冬の日の木洩れ日混声四重唱
茶の花や母の晩年まだ永し
左手も添へて書を読む一葉忌
新幹線降りてとろろを食べにゆく
開けたてに障子の軋む郷土館
冬枯れの畑仕切りて売られけり
しぐるるや鱈酒の味まだ知らず

山河集

同人作品



神蔵
器選

秩父嶺に眼を休まする松手入 根岸 善行

小品は眼鏡はづして松手入
山頂に白き塔立つ小春かな
日向ぼこ暗き部屋より呼ばれけり
綿虫に華やぐ雲となりにけり

群青の 大空わたる望の月 柿沼 盟子

大小の石敷く順路冬もみぢ
行き止まる水に走り根冬の鳥
かうかうと灯す境内神の留守
上水の跡の濁りや冬の鯉

短日や横浜西口地下通路 館 泰生

花八つ手早や夕刊の来る時間
喪中葉書母の天寿や冬初め

柚子一本ひとりが守る一戸建
手をかざし見つけし一箇烏瓜

大綿や鑑真和上御廟前 中村 洋子

竜の玉百種の和紙の見本帳
竜の玉村雲切の貫之集
竜の玉ひらがな飛雲料紙本
石投げて十一月の水の音

外苑の銀杏落葉を踏みにゆく 竹久みなみ

小六月夜半の青空仰ぎけり
雨が降る家族総出の熊手売り
十一月メタセコイアに逢ひにゆく
武蔵野を通る木枯聞きすます

◇特別作品◇(抄)

榛名山賦

竹久みなみ

山路来て榛名恋しと時雨れけり
榛名路のなほも燃えたる冬紅葉
小春日のトテ馬車湖を一巡り
榛名山その懐に枯葉かな
榛名湖の寄するさざなみ浮寝鳥
茜さす残る紅葉と解け合へる
オレンジ色まみれし全山枯葉負ふ
银杏散る榛名の杜の巫女と逢ふ
トテ馬車の馬も五代目風花す
榛名富士冬夕焼を背負ひけり

風土独語／神蔵 器



枯蓮やこ糸を聞くまで立ち尽す

安永 圭子

枯蓮は枯れてゆく多くの植物の中でも、多数の蓮がいつせいに枯れ、刀折れ矢尽きたるさま、荒涼とした無惨な光景を現出する。俳人たちにとってはそこが付け目、好題材になっている。従って写生句は多くあるが、内容は大同小異で、写生を越える句がなかなか生まれにくい。

掲出句は枯蓮の声を聞くまで立ち尽す、ということであるが、それは、他ならぬ作者の胸の奥に自分自身の本音を聞きとるまでということではなからうか。私の場合は、眼を開いてよくよく見た後は、静かに眼を閉じていつまでもいつまでも立っている。

手を引きし坂や大根持ち替へて

北島 和契

この句は大根を「持ち替へて」にポイントがある。私は作者の家族構成は全く知らないが、上五の「手を引きし」で、これは、母親の手であることがはっきりと想像出来る。

おそらく作者は、夕餉の買物に出た母親と途中でバッタリ会い、その時、お母さんの買って持っていた大根を作者が受け取り二人は並んで歩き出した。暫くして坂道になると、作者は右手に持っていた大根を左手に持ち替え、今度は右手でしっかりお母さんの手を握り坂を上って行ったのだ。母子の間に、どんな会話あったかは解らないが、一歩一歩手を引いて坂を登る母と子の幸福感、あたたかい血の流れを実感する。

御僧と兜太 同郷 小六月

須藤美智子

須藤さんのお宅に法事か何かあつて、檀那寺の御住職お招きしたのであろう。たまたま俳句の話になって、ご住職も秩父の出身であることを知った。兜太は大正八年生れ、秩父盆地に育っている。御僧は兜太より大分若いであろうと思うが、兜太と同郷であることが頼もしく誇りに思っているようだ。作者との会話も思わぬ方向に発展して何とも楽しい。

兜太先生については今更私が何も話す必要もないので、代表句を五句ばかり挙げておく。

霧の村石を投うらば父母散らん
人体冷えて東北白い花盛り

梅咲いて庭中に青鯨が来ている
夏の山国母いてわれを与太と言う
暗黒や関東平野に火事一つ

風土集



神蔵器選

枯蓮やこ糸を聞くまで立ち尽す 横浜 安永 圭子

今共に円月橋や藪柑子

ふくら雀酒亭九八屋覗きけり

蓬萊島に史劇映せり冬紅葉

神田川十一月を蔵しけり

智徳院一旬

京都

杉本葉土子

金色の弥陀の前なる冬桜
堂内に忘れ傘あり去年今年
花八つ手母の忌日を忘じけり
美しき手の神父なり冬薔薇
冬の虹五山の上の大円盤
舟で行く湖の追分しぐれくる
枯葦に舟頭語る初恋も
枯桜湖畔の夢を抱きつつ
唄の出で近江の冬の生糸取女

舞鶴

福田 周草

大津絵の鬼がをどるや煮大根
手を引きし坂や大根持ち替へて 川崎 北島 和契

寒気来る水銀柱の脈の音

カナリアの檻は空つぽ冬林檎

馬の尻瘦せて歩める寒さかな

冬の月非常階段下の蒼

御僧と兜太同郷小六月 さいたま

須藤美智子

木枯一号だんだん耳の遠くなり
百幹の竹の葉さやぐ桂郎忌
護られて朱鷺はケージに神の留守
冬耕のはや山の影及びけり
冬桜ぽぽと水戸藩上屋敷
洒れぬてふ不老の井戸や石露の花
鳥ご糸の降り来る冬の花わらび
枯れに入る園の要の一つ松

東京

林 いづみ